

難波西鶴と 海の道

【45】

森田 雅也

新年を迎え、皆さまに寿ぎを申し上げます。

前回は、西鶴の『日本永代蔵』元禄元(1688)年刊に書かれている日本と朝鮮の海洋交易の逸話でした。ここで、新年のお神酒気分にし得て、西鶴から閑話を一つ。

今も昔も正月迎えば楽しいものです。歳末の買物にはつい力が入り、高い物でも買ってしまうものです。そ

んな時の言い訳は必ず、「正月の縁起物だから」ですね。

同じ『日本永代蔵』巻四の五「伊勢海老の高買」に面白い節約法が書かれています。「生あれば食あり、世に住むからは、何事も案じたるが損なり。

毎年、世間がつまり、我人迷惑するといへど、それぞれの正月仕舞、餅突かぬ宿もなぐ、菓子買はぬ人もなし」

生きているものは何とかして食べていけるものだ、ということわざがありますが、明日

を煩うことなけれ、世間が不景気でも皆、相應に正月の用意はするもの。餅をつかない家はなく、数の子を買わない人はいないと言っているのです。その上で、正月迎えの消費について書きます。

「惣じて、人の始末は正月の事なり。まだ堪忍のなる道具を改め、内着・疊の表替・籠の上塗、万事わつぱりと気を付け、一つ一つ目にも立たずして、物入り年中の損なり」

一般的に、人が始末

西鶴はどう描いた？

すべきは正月準備だ。まだ使える道具を直し、家を直したり、畳表を替えたり、籠の上塗りなど、一つ一つは目立たないけれど、総額ではかなりの無駄をしていると言っている。

続けて言うには、正月用だと特別視しているところ、ある年江戸では、品切れのために、正月用の伊勢海老が1匹小判5両(約50万円)、橙が一つ3両にも高騰したと言っています。

武家方では無くてはならない縁起物です。江戸ならではの困った事情と言えるでしょう。

しかしその年、大坂でも、伊勢海老1匹、2匁5分(約5千円)、橙1つ7、8分(約8百円)。高すぎます。そんな時、今の堺市に住む「樋口屋」という

賢い儉約家が、「蓬菜は、神代このかたのならはしなればとて、高直なる物を買ひ置へて、これをかざる事何の益なし。天照太神もとがめさせ給ふまじ」と言いついて、正月の蓬菜飾りに、伊勢海老の代わりに車海老、橙の代わりに九年母を積んで済ませたころ、「才覚男の仕出し」と堺中に流行し、その年は皆、伊勢海老、橙を買わずに済ませたそうです。

最近縁起を構わなくなるとはいえ、高くて毎年正月迎えの消費、考えさせられますが、私は正月くらい祝儀をこめて、財布の口を緩めたいですね。

(関西学院大学文学部文学言語学科教授)

正月の縁起物